

P-374 肺腺扁平上皮癌の臨床的、病理学的特徴とその予後に関する検討

鳥取大学第2外科

○田中宜之、中村廣繁、堀尾裕俊、森 透

目的：近年予後不良と言われる腺扁平上皮癌の特徴と予後を検討し、予後不良原因を考察する。

対象：1980年1月から1991年12月までに当科にて手術を受け、術後病理学的に腺扁平上皮癌と診断された7例を対象とした。

結果：1) 対象患者の特徴：全例男性で年齢は37~81(平均69)歳、術後病期はⅠ期1例、ⅢA期4例、Ⅳ期2例であった。手術術式は葉切+R2リンパ節郭清3例、葉切+胸壁、横隔膜合併切除+R2リンパ節郭清2例、葉切+右腕頭静脈合併切除1例、試験開胸1例であり根治度は相治5例、絶非2例であった。また術後療法としては化学療法のみ2例、放射線療法のみ1例、化学療法+放射線療法+免疫療法1例、施行せず3例であった。

2) 生存率：①Kaplan-Meier法による累積生存率は1生率57.1%、3生率0%、5生率0%、平均中間生存期間13ヶ月であり、これは同年代に経験された扁平上皮癌、腺癌の生存率と比較して有意に予後不良であった。死因は全例が癌死であった。②全肺癌症例を対象とした比例ハザードモデルにおける予後因子の解析では腺扁平上皮癌は有意に予後不良となる因子であった。

結論：腺扁平上皮癌は発見時すでに進行癌であることが多く、その予後は他の非小細胞癌と比べ不良であった。この事実とその原因を含め考察を加えて報告する。

P-375 肺癌における試験開胸術の検討

国立療養所沖繩病院

○久田友治、国吉真行、石川清司、源河圭一郎

目的：肺癌で試験開胸術にとどまった、症例の解析を行い、その課題を検討した。対象：1980年から91年まで、国立療養所沖繩病院で入院治療を行った肺癌症例のうち、試験開胸術におわった47例を対象にした。これは原発性肺癌全手術例の約7%にあたる。男性38例、女性9例。年齢は36歳から77歳、平均61歳。組織型は扁平上皮癌22例、腺癌19例、小細胞癌3例、大細胞癌2例、その他1例。

結果：試験開胸の各年度の例数は1980年からそれぞれ4、4、6、2、1、3、1、4、2、4、9、7例であった。試験開胸の理由としては縦隔リンパ節腫脹が著明で固定しているもの23例、腫瘍の隣接臓器への浸潤20例、胸膜播種または肺内転移19例であった(重複あり)。ほとんど全例に癌化学療法か放射線療法もしくはその併用療法が行われた。予後は、中間生存期間が10カ月であり、約1/3の症例が1年以上生存した。1例(54歳、男、ⅢA期、腺癌)だけBAIを含む化学療法により5年以上生存中の患者がいる。考察：全手術例に対する試験開胸術の割合が年度別にみて減少していないことより、手術適応決定時の画像診断を中心としたより厳密な検討が必要である。また少数例ではあるが、治療により延命する可能性があり、試験開胸に終わった症例でも治療の工夫が必要である。

P-376 非小細胞肺癌の試験開胸例の検討

浜松医科大学第一外科

○小林 亮、豊田 太、野木村宏、鈴木一也、原田幸雄

【目的】治癒切除を目的として開胸した非小細胞肺癌で術中に切除不能と診断され試験開胸に終わった症例について臨床的検討を加える。

【対象】1978年4月より1991年12月までに当科で開胸手術を受けた非小細胞肺癌156例のうちの試験開胸症例。

【結果】試験開胸に終わった症例は17例(10.9%)で年齢は46歳~80歳、男性14例・女性3例であった。これらの病理組織型は扁平上皮癌8例・腺癌7例・大細胞癌2例で、術前の病期分類はStageⅢaが最も多かった。術中に切除不能と診断された根拠は胸膜播種や腫瘍の心臓・大血管への浸潤があり、肺全摘除や心臓・大血管の合併切除再建を行った場合、合併症のリスクが高いという理由によるものが多かった。術後の経過は術死1例(急性呼吸不全)を除く16例は化学療法・放射線療法などを受けた後退院し、1例が著効を示したため肺全摘除術を受け、その他の15例は2~12カ月で癌死している。

【まとめ】最近の当科での傾向として胸膜播種だけが試験開胸の理由となることはまれで、肺全摘除術や心臓・大血管の合併切除が可能か否かが腫瘍切除の成否を決める場合が増える傾向にある。

P-377 肺癌切除例における気管支断端陽性例の検討

宮崎医科大学第2外科

○松崎泰憲、柴田紘一郎、吉岡 誠、井上正邦、白間康博、山本 淳、清水哲哉、久保田伊知郎、鬼塚敏男、関屋 亮、市成秀樹、澁谷浩二、原 政樹、安部要藏、岩本 勲、古賀保範

当科において肺癌切除手術後永久標本で気管支断端に癌の浸潤が認められたbrs(+)例が、肺癌手術390例中、22例(5.6%)に認められた。うち術死2例を除く20例について検討した。年齢は39~74才で、男性17例女性3例であり、組織型は扁平上皮癌13例、腺癌5例、大細胞癌1例、carcinoid1例であった。病期はⅠ期8例、Ⅱ期2例、ⅢA期9例、Ⅳ期1例(pm例)であり、術式は肺葉切除19例、2葉切除1例で、術中迅速病理は2例に行われた。断端浸潤様式は、気管支全層に及ぶもの13例、気管支軟骨より内側のもの3例、外側のもの3例、断端周囲リンパ節浸潤1例であった。併用療法は化学療法6例、放射線治療3例、化療+放射線治療4例であった。予後は20例中9例が死亡し、死因は局所再発3例、遠隔転移を含めた癌死4例、他病死2例であった。絶対的非治癒切除例54例のうち、brs(+)20例とbrs(-)34例について予後を比較してみるとbrs(+)群(MST:84.2ヶ月)が、brs(-)群(MST:13.6ヶ月)より有意(p<0.05)に良好であった。以上、肺癌切除例の気管支断端陽性例について検討を行ない、その臨床的問題点について報告する。